

視察報告書

所属会派	おかや未来研究室	氏 名	藤森 弘
視察の名称	市町村議会議員特別セミナー		
日程	令和 7 年 4 月 21 日（月）13：30～15：00		
視察要点等	講演会『地域の宝』を世界にひらく世界遺産の可能性		

【概要】

講演会『『地域の宝』を世界にひらく世界遺産の可能性』は、宗像大社宮司であり宗像国際環境会議副会長でもある草津敬之氏によって語られた。宗像地域の歴史的・文化的価値と、自然と共生する未来像を提示する内容であった。

【内容】

講演は、主に三つの柱—宗像の歴史、世界遺産登録の経緯、そして環境と命を繋ぐ「常若（とこわか）」の思想—を通して、古代の叡智と現代の課題が交差する意義深い視座を提供する内容だった。

第一に、宗像の歴史について。宗像大社は日本神話にも記される古社であり、三女神（タゴリ姫・タギツ姫・イチキシマ姫）を祀ることから、古代日本の神話的起源と深く関わる地とされてきた。その立地は海洋交通の要衝であり、朝鮮半島や中国大陆との交流の窓口として、外交・貿易・安全保障の拠点として機能していた。宗像海人族は外海航路を担い、内海の安曇族と共に海上国家としての日本の礎を築いた。また、神道における神託によって「歴代天皇を助ける」という役割を授かったという点も、宗像の信仰の重要性を物語っている。

第二に、宗像の世界遺産登録の経緯とその背景には、文化と思想の再解釈があった。当初の推薦書では日本神話の記述が意図的に除外され、ユネスコの審査で不採用となったが、再挑戦の際には「Spiritual Ecology（精神的生態学）」と「Animism（アニミズム）」というキーワードを用いて再構成された。これは、自然そのものを神聖視する日本古来の精神文化を国際社会に理解させるための戦略的な再定義であった。結果、審査員の多くが共感し、全会一致で世界文化遺産として登録が認められるに至った。

第三に、「常若（とこわか）」という思想が宗像の環境活動の根幹を成している。これは、単なる長寿や若返りを意味するのではなく、生命の再生と循環、すなわち自然と文化の持続的共生を象徴する概念である。宗像では海洋環境の悪化に対応するため、地元高校生が主導した竹漁礁づくりや海岸清掃などの活動が展開され、また宗像国際環境会議が設立されることで、地域から地球規模の環境課題に向けたアクションが展開されている。

さらに講演では、伊勢神宮の式年遷宮や 200 年単位で育てられる森を例に挙げ、「千年単位の持続可能性」が語られた。宗像の「常若」の思想は、まさにこの時間感覚と共鳴しており、SDGs に見られる短期的視野とは一線を画す。アニミズムと常若は、現代人が失いつつある「自然との共鳴」を取り戻す鍵であり、宗像が世界に示した「生き方の哲学」でもある。

このように宗像は、過去の神話と歴史、現代の環境再生、そして未来への思想的指針を兼ね備えた地域である。そこには、日本が世界に誇りうる「持続と再生の文明」が確かに息づいている、との力説が展開された。

【感想】

草津敬之氏による「地域の宝を世界にひらく世界遺産の可能性」の講演は、宗像の神話的背景と現代的課題が交錯する中で、自然遺産を未来へつなぐ価値を改めて認識させられる機会となった。とりわけ「常若（とこわか）」という概念—生命の連続性と再生を象徴する思想—は、岡谷市のような内陸都市にとっても重要なヒントを含んでいた。

岡谷市には、かつて自然との共生が根ざしていたが、都市開発や利便性の追求によって、山・川・湖の本来の

豊かさが軽視されつつある。だが、宗像の取り組みから学べるのは、「信仰」「文化」「生態系」が一体となった環境政策のあり方である。単なる保護や観光誘致ではなく、住民と自然が共に息づく“精神的風土”としての自然遺産こそ、見直すべき価値ではないか、と考えさせられた。

今後、岡谷市においても「とこわか」の思想を参考にして、環境を“再生”しながら未来へと継承していく政策の再設計が必要だろう。今回の講演は、自然遺産を「守る」だけでなく、「育てる」意識への転換を促す貴重な啓発の契機となったように思う。